

翻刻『梅屋敷の記——名このはな』
翻刻『松島紀行』

『このはな』（甲和二九八） 黒沢翁満書 弘化二年写 一冊（二五・五×一七・五。m）

表紙の書名『このはな』、内題『梅屋敷の記』、本文十丁、半丁に六行あて記載。表表紙の裏に、本文とは異なる字で「武蔵忍藩黒澤翁満先生書」と記された付箋、内題の下に

〔平迺家蔵書の印があり、本文末に、「弘化二年二月十八日 翁満記」と記されている。

弘化二年二月、奇しくも大坂で会した四人の風流の士、小倉藩の大坂留守居役として赴任していた西田直養、武州忍藩大坂蔵屋敷勤仕の黒沢翁満（葎居）、因幡藩士として大坂在勤中の小林大茂、紀州藩士加納諸平（柿園）が、当時の梅の名所である梅屋敷へ船路で寒梅に出かけ共に過ごした一時を後の思い出にするべく、西田直養の発案で黒沢翁満がものした作品である。

舞台となった梅屋敷は、「摂津名所図会大成」、「浪華の賑ひ」等によれば、東都亀戸の梅屋敷を模して、文化年間に造ったもので、上之宮より乾の方、生玉馬場の東（現在の upper 町六・七丁目辺）にあり、園中に梅を植え、樹下に席を設け、如月の花の頃は清香四方に満ち、風流の好士が群れ集い遊観、また秋には菊観で賑わったとある。後年、平坦なつくりの同屋敷の北方に、地に高低をつけた新梅屋敷が出来たことから、旧梅屋敷と呼ばれた。明治三十六年頃は華城第一の梅の名所であったが、日露開戦の二三年後には、山口銀行主の山口吉郎右衛門氏本邸となり、大正期には忘れさられてしまった。



〔浪花百景一梅屋敷一〕（貞信画）



「浪花の賑ひ」より 梅屋敷（松川半山画）

〔松島紀行〕（甲和一二八五） 〔西山宗因〕著 寛文三年写 一冊（二五・五×十
八・五cm）

本書は、『松島紀行』と題したが、表紙・本文中には、書名・著者名共記載されていない。

表題紙（白紙）一丁、本文十四丁、半丁に八行あて記載、七丁と一行が松島への紀行文、後に続く和歌百首の冒頭に宗因が名を記載、本文末に「干時寛文三年蠟月五日書也」とある。

宗因の奥州紀行は、「奥州紀行」「奥州塩竈記」「陸奥塩竈一見記」「松島一見記」

「陸奥行脚記」等内容に異同を伴った作品となり、八木書店の『西山宗因全集4巻―奥州紀行―/二巻―連歌篇二―』に翻刻して収載されている。本書は、その内の東京大学史料編纂所「西山宗因筆歌書」（宮津三次郎氏旧蔵宗因自筆本影写）、学習院大学所蔵の宗因自筆「西山宗因陸奥行脚記」と同系統の作品と思われるところから、同書に追加する意味で翻刻を試みた。

参考文献

「撰津名所図会大成」 暁鐘成著 松川半山画 柳原書店 昭和五十一年刊 三七八/一〇七

「浪華の賑ひ」―梅屋敷― 暁鐘成編 松川半山画 河内屋喜兵衛 安政二年刊

「浪花百景」〔一名 浪花土産〕―梅屋敷― 長谷川貞信画 綿屋喜兵衛刊 三七八/五

三六

「浪花百景―梅やしき」中井芳瀧画 立風書房 昭和五十一年刊 ぬ/一七八

「浪花百景 いまむかし」 大阪城天守閣編刊 二九一・六三/四八一N

「浪花自慢―別名風流画口合浪花名所道案内」櫻亭似螻撰 松川半山画 三七八/一四二

「保古帖 十五巻・大坂嘉永二酉花鳥記」 〇四五/一六〇

「大坂繁昌詩」 田中金峰著 紀律堂蔵版 慶応三年刊 二三七・七/六八

「大阪と博覧会」第五回内国勸業博覧会協賛会編纂 明治三十五年刊 八〇七/三三五

「上方」三十号―三十年前の大坂東郊（寺川信著）― 上方郷土研究蚊会編刊 雑四六八

「写真集 なにわ今昔」毎日新聞社 昭和五八年刊 三七八/九二一

「西山宗因全集 二巻 四巻」 西山宗因著 八木書店 二〇〇六年刊 九一八・五

／一八N

凡例

本文は底本を忠実に翻刻することを原則としたが、通読の便を考慮して、句読点を施した。

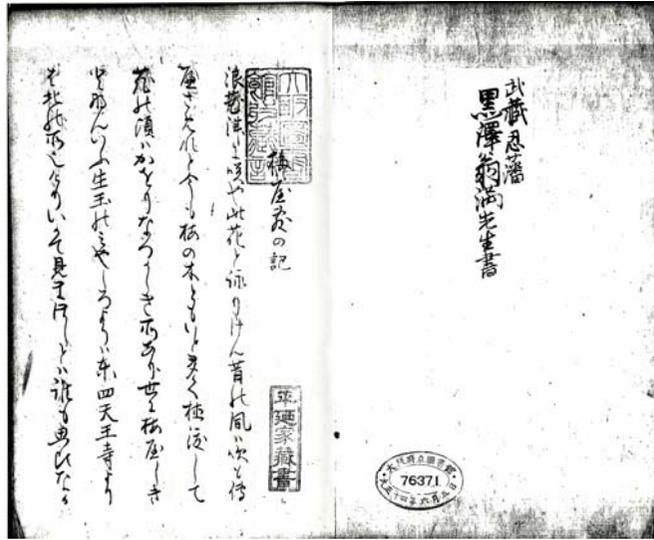
底本にある旧字体はそのままとしたが、一部活字のない物は通行の字体とした。

底本にある振り仮名はすべてそのままとした。

特殊な合字・異体字・連字体などは通行の字体に改めた。

底本が虫損により、判読困難な場合は「□」で、判読が可能な場合は「」で示した。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヿ」「ヾ」「ヿ」「ヾ」「ヿ」は底本のまま、漢字のくり返しは「々」で表示した。



「梅屋敷の記」



「松島紀行」